

# スポーツのチカラ まちのミライ



2030北海道・札幌オリンピック・パラリンピック冬季競技大会が実現すると、私たちの街・札幌はどのような姿へと変貌を遂げるのでしょうか？  
車いす建築士の牧野准子さんにお話を伺いました。

知らないでいることから生まれる社会のバリア  
2030年冬、冬季オリパラを社会課題に向き合う契機に



ユニバーサルデザイン(有)環工房代表取締役  
(公財)ノーマライゼーション住宅財団理事  
北海道建築士会札幌支部理事  
札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会委員  
車いす建築士  
牧野 准子 さん

1958年生まれ、倶知安町出身。1996年から建築デザイン会社代表取締役としてまちづくり活動に参加。2005年に脊髄の進行性難病を発症し車いす生活に。以降、「車いす建築士」目線で建物のバリアフリーに関する調査や提言、ノーマライゼーションの実現を目指す活動などに取り組む。

取材協力：ノーザンテラスデザイナー（札幌グランドホテル）

車いすユーザーになって見えた世界

無理解・無関心が社会のバリアにつながる

45歳の時に進行性の難病を発症し、以来車いす生活になりました。人生が突然180度変わり、日常生活の様々なギャップや生きづらさに苦悩しましたが、車いすの目線だからこそ気づいたこともたくさんあります。例えば公共施設でも、ルート案内や誘導の情報が不明瞭でバリアフリー設備にアクセスしにくいなどは、実際に体験しないとわかりません。バリアフリー化を進めるには、まず利用者が何を障壁(バリア)と感じるのかを知ることが大切です。人々が知らないでいることが社会のバリアにつながっています。本当の障がいとは、体の不自由さだけではなく環境と人の心にもあると思います。

一人ひとりの「心のバリアフリー」が重要  
社会課題を自らの問題として向き合おう

バリアフリーの社会を必要とするのは、高齢者や乳幼児連れの方、妊婦さんも同様です。また、健常者であっても、怪我や病気で障がいを抱える可能性は誰にでもあります。誰もが安心して社会生活を営めるようにするには、施設の整備などのハード面だけではなく、他人の困難を自分事として捉え行動する「心のバリアフリー」こそが重要です。札幌市が冬季オリパラの招致を目指している2030年は、SDGsの目標年でもあります。札幌市はSDGs未来都市として、全ての人が受け入れられ活躍できる未来を、世界に示す必要があると思います。2030年冬季オリパラ招致が社会課題を知る機会となり、「心のバリアフリー」を自らの問題として向き合う第一歩となることを願っています。

問い合わせ先

札幌市スポーツ局招致推進部調整課 ☎011-211-3042



食や自然など多くの魅力に恵まれた  
「笑顔になれる街」さっぽろをイメージしたロゴです  
問い合わせ先  
札幌市総務局広報部広報課 ☎011-211-2036